

資料3 第五章と第六章のキーワード一覧。議論の流れ。

*当日はこの資料の「キーワード」にあたる部分のみ配布して第五章、第六章の著者の主張を確認していきました。

第5章のテーマ

近代の基本的な思想である理性、科学、政治学、経済学がどういうふうに代議制の自由民主主義に結実していったのか？ 「代議制自由民主主義の限界とは何か」

キーワード

- ルネサンス
- 近代的理性 - デカルト - 近代的な主体
- 科学 - ニュートン - 永遠不滅の本質 - 近代科学の二面性 - 批判的対話と公開の原則
- 自然状態 - ロック - ホッブス - 自然権 - 自然法 - 社会契約
- 自由主義と民主主義 - ルソー
- 経済自由主義 - アダム・スミス - 同感（シンパシー） - 神の手
- 功利主義 - ベンサム - 「最大多数の最大幸福」 - 快楽と苦痛の数量化
- アメリカのタウンシップにおける自由民主主義 - トクヴィル
- 1968年 - ポスト工業化 - マイノリティ

第五章の要点

- ルネサンス＝身分制度にもとづいた中世秩序の崩壊

⇒「われわれ」が無くなり、代表がゆらぐ。

⇒別の代表の仕方を模索することになって、自由民主主義にいたる。… p.262

- ルネサンスの原因の象徴とされるもの：
 - 火薬：下剋上を可能に
 - 羅針盤：それまでと異なる富の配置を生じさせた。港湾都市や金融都市が台頭。
 - 印刷技術：聖書についての多様な解釈が生まれる。
- ルネサンスを可能にした世界観の変化＝自分を中心にした世界観（遠近法に象徴される）
- 近代科学：神のロゴスからこの世の現象を説明する「演繹法」から、この世の現象の観察の積み重ねによって真理に至る「帰納法」の考え方へ。ガリレオの名に象徴される。

⇒昔どおりにやっていたら没落する、自分で最新技術を手に入れて、自分を中心に考えて行動する人間だけ生き残れる時代

⇒ゼロから世界のあり方、人間のあり方を考え直そう、という以下のような人たちが出てきた。

【デカルト】

- 近代的理性：感覚でとらえられるものを捨象して、本質＝普遍的な「法」を把握する能力。この能力を与えたのは神。この能力を行使して世界を把握する＝神と繋がること。神と繋がることは「私は存在する」ことを確信させる。
- 「近代的な主体」＝普遍的な「法」を共有する「われわれ」＝「人間」

【ニュートン】

- 近代科学
- 世界の現象に隠された永遠不滅の本質（「神の息吹」）への信念（発想の点で錬金術と酷似）

⇒ホモ・エコノミクス：数字で計れる利益の増大（貨幣の獲得）だけを目的にし、ほかの目的をいっさい持たず、つねに情報を集め合理的に行動する人間、というアイデアと似ている。

*近代科学の二面性：（１）実験をすれば分かる、（２）実験よりも理性と数式で世界を把握する。この二面性に折り合いを付けるのが「批判的対話」：対話や討論によって、おたがいの臆見を超えた真理に至る。したがって公開の原則が前提

【ホッブス・ロック】

- ホッブス、ロックの政治思想：理性を持つ「人間」が契約して権力（ないし社会秩序）を作り、自然権を守る。

《ホッブス》

- 基本的な考え方：「この世はすべて、物体の運航と原因・結果の関係で書くことができる。人間の行動もそうである。だから政治の体制も、その考え方で論じることができる。」（288-9 頁）
- ホッブスにおける自然状態：
 - 人間は政府や国家をもたない。

- 自然権＝生命を守る権利を有する
- 生存にとって有利なものを「善（good）」とみなし、富や権力を善の獲得手段として追及する。
- この「善」は感覚に基づくため「共通善」ではありえない。

⇒争いがたえなくなる

- 心身能力に大差はない。
 - 人間の本質は上の意味での「善」を追究すること。その限りみな **平等**。
 - **「万人の万人にたいする闘争」状態**
- どうして共同体「われわれ」が生まれるか：
 - 感覚を超えた「**理性**」によって「この世の**法則**」を見いだし、全員がいったん**自然権を放棄**することによって闘争状態に終止符を打つ。
 - 自分たちの自然権＝生命の安全を守るために、人工的な権力を作る契約を結ぶ。
 - 共同体の中で認められる権利：
 - 争いのもととなるため、権力に抵抗する権利は認められない。ただし **政治体**が**自然権**を守ってくれなければ契約解除も可能。

・・・「自由で平等な個人が、理性的な契約で国家を作るという考え方」

《ロック》

- ロックにおける自然状態：
 - 自然状態でも自然法が働いており、それゆえ人間は調和して暮らすことが可能。
 - 自然権は生命維持だけでなく所有権も含まれる。
 - 人間は始めから理性を有し、それゆえ自然権を認めることができる。
- どうして共同体「われわれ」が生まれるか。
 - 貨幣が導入されると欲望が無制限になり、自然状態が崩れる。
 - 自然法を守る秩序が必要になる。
 - 外敵に対抗する必要も出てくる。
- 共同体のなかで認められる権利：
 - 抵抗権、革命権
 - 政府は財産を守るためにあるのだから、不当な財産侵害をしたら抵抗することができる。
- ホッブスとロックに共通する考え：
 - 中世の秩序が崩れ、人間がばらばらになっていくなかで、そうなったら個々人の契約によって国家を「作る」と考えた点。
 - また、国家は権利を守るための人口装置にすぎず、契約解除の権利も認めた。

- ロックは特に、抵抗権を認め権力分立も考えたため「近代自由主義」の元祖と言われる。

【ルソー】

- 近代民主主義の元祖

☆自由主義と民主主義

- 自由主義：権力から自由になるのがいいという考え方

⇒権力はできるだけ小さく、できるだけ税金は安く、人々が自由になるほどよい。しかし何の制限もなければ自然権が守られないかもしれないため、しかたなく、合意のうえで人工的に権力をつくる。

- 民主主義：みんなで権力を作るのがいいという考え方

⇒みんなで「われわれの権力」を作り、「われわれの意志」が反映されて運営されることが目的になる。

・・・ではどうやって「われわれ」を作るのか？

- 古代なら民会に集まることによって「われわれ」を作れた。

⇒しかし国が大きくなるにつれてそれも不可能になる。

- しかしまた代議制は封建制の産物。既存の秩序を前提としなければ代表されるべき「われわれ」など存在しない。
- ルソーの考えた「われわれ」の作り方：「われわれ」を作ることを目的として社会契約を行う。

⇒ロックやホブスの場合自然権を守るのが目的でそのための手段として国家を作ったが、ルソーの場合「われわれ」を作ることが目的としていっさいの自然権、身も心も財産も全て共同体に譲渡する。

⇒こうして「私」がなくなると、共同体に「共通自我」が生まれ、それが「一般意志」を持つ。

【経済】

- アダム・スミス：経済自由主義の元祖
- 経済自由主義：経済活動のためには、政府は余計な介入をしないほうがいい、権力はできるだけ小さいほうがいい。

・・・しかしそれでは格差が生じて「われわれ」ができなくなるのではないか？

⇒スミスは、人間には神から他人の感情に共鳴する「同感（シンパシー）」の能力が与えられていると考えた。

- 他人の喜ぶものを作らなければ自分の欲しいものは手に入らないため、利己的になればなるほど、同感がよく働くようになり、分業が進み生産が増えていく。
- 政府が介入せず、自由に任せれば「見えざる手」に導かれて幸福が訪れる。

- ✓ 放っておいても人間はばらばらにならないのは、他者の幸福を喜び、不幸を悲しむ同感の本能を神が植え付けていることが前提。

⇒ 神が「われわれ」の存在を、自由と平等の両立を保証している。

【「数量」の重視】

- ベンサムの功利主義：快樂・苦痛を計算し、「最大多数の最大幸福」を目指して法律を作ればいい。
- 背景にある思想：「法の原理は、貴族が有利になってしまうような抽象原理、道徳家の主観で決まる正義とか自由とかは排除して、平民でも感受できる、感覚でつかまえられる快樂と苦痛を最大化すべきである。そしてそれが誰の目にも明瞭になるように、数量化すればいい」

⇒ 快 楽 と 苦 痛 が 数 量 化 で き る こ と が 前 提

- どの人間も——王も農民もプロテスタントも——等しい快樂感受能力を有する「一人」の人間にすぎない。
- しかし「最大多数の最大幸福」は快樂計算を行う範囲、「われわれ」を前提としているところがある。また、少数派の意見が蔑ろにされる。

☆以上の思想を組み合わせると次のようになる。

「人間には合理的に判断する能力がある〔近代的主体〕。人間は利己的だから、利益を極大化するように動く〔ホブス、ロック、スミス〕。それでも争いはおこらず、むしろ個々人が利己的に行動すればするほど、社会は豊かになって共存共栄する〔スミス〕。人間が追及する利益は数値化でき、それは経済なら貨幣による市場の取引量、政治なら得票数で表せる〔ベンサム〕。だから表を集めた政党が政権につき、多数決で法律や政策が決まる制度を作っておけば、最大多数の最大幸福が実現される〔ベンサム〕。ただし政府はあまり民間に介入しないほうがいいし、少数意見の尊重は必要だ〔ミル〕。」（215頁）

- しかしこれは、**前提において相いれない**思想のパッチワークにすぎない。
- また、有産層に支持される自由主義と貧困層に支持される可能性の高い民主主義とはもともと両立しにくい。

☆しかしアメリカでは両者が両立している。アメリカでは全員が平等（貴族がない）で権力から自由で、全員が政治に参加しつつ権力が小さい。

- 自由民主主義が定着する社会条件（トクヴィルによる）
 1. 耕す土地が多いため、競って耕せば格差は大きくなる。そのため各人が平等で自由なままでも権力は小さくて済む。
 2. 自治組織としての township——全員が **平等** に入植し、**自由意志で参加** して一員になった人工的共同体——が身近で、参加意識が非常に強い。
 - a. **直接民主主義的な政治参加** が行われている。
 - b. 権力が分権化されている。
 - c. 持ち回りの公務が多い。

⇒参加意識が強く、自発的に「われわれの法と秩序」を守ろうという意識も強い。そのため平等で自由でも権力が小さくて問題ない。

3. 法律家や上院議員が知恵をもっている。
 4. 宗教が強く理念的な結びつきも強い。**理念のもとに「われわれ」意識が作られる。**
- しかしこれらが自由民主主義の必要条件だとしたら、これらの条件が成り立たない場合には、自由民主主義もなりたたないことになる。

⇒当時のアメリカと違ってスタートから格差があり、地域社会に権限がなく、理念的な結びつきもない社会では、要になる人物が「われわれの代表」と思われているあいだしか、擬似的にせよ自由民主主義は成立しない。

あるいはこうも言い換えられる。

代議制の民主主義は人々が「自由」になる度合いが低く、地域共同体や理念、あるいは身分といった「われわれ」意識があるときにしか成立しない。

- 「六十八年」

まさにこの「われわれ」意識の存立に疑義が投げかけられたのが「六十八年」の学生叛乱：政治に参加するには「現体制」の一員にならないといけないことがまんならない。

⇒「われわれは代表されていない」という声は、女性やセクシャルマイノリティからも上がった。

「社会構造が変わるなかで、既存の代表制のなかで認められてきた『われわれ』の類型に、あわない人びとが声を出してきた」（330頁）

- 六十八年以降、社会のポスト工業化——情報技術の発展とともにグローバル化が進み、安定雇用が崩れ（非正規雇用の拡大）、労働組合が組織率を落とし、格差が増大——がすすむと、「自分たちは政党に代表されていない、既存の社会に居場所がないという思いを抱く人が増えてゆき、政治が不安定化していく。」
（332頁）

第 6 章 の テ ー マ

二十世紀思想の振り返ったうえで代議制自由民主主義の再活性化の方途を探る。

キ ー ワ ー ド

- 理性を行使する主体への疑い
- (相対性理論)
- (第一次世界大戦)
- (不確定性原理)
- 現象学 - 個体論から関係論へ
- 構築主義 - 再帰性 - 作り作られる関係
- 物証化 - 弁証法 - 問答法 - 雄弁術

- 再帰的近代化 - アンソニー・ギデンスvs単純な近代化 - カテゴリーの限界
- 対話民主制／エンパワーメント／フレキシキュリティ／保護・パターンリズムからの脱却／自発的結社の利用
- ブーメラン効果
- リスク

第六章の要点

- 二十世紀思想の振り返り：理性を行使する主体への疑い。個体論から関係論へ

二十世紀の科学の流れ

- 相対性理論：世界を把握できる中心的な視点はない。
- 第一次世界大戦：人間は科学を制御できないし、世界を把握することもできないという感覚が広がる。
- 不確定性原理：観測をしても必ず一定の不確定の領域が発生する。⇒完全に精確な観測は原理的に不可能。

二十世紀思想の流れ

- 現象学「個体論から関係論へ」

- 個体論：あらかじめ「私」や「あなた」がある、それが相互作用する、という考え方。
- 関係論：関係のなかで構成されてくる、相手も自分も作り作られてくる、という考え方。
- 構築主義＝現象学的社会学：自分も相手も作り作られてくる（再帰性）ものだから、それがどんなふうに構築されてくるかを考える。

⇒関係論的な考えに立つと、問題がどうやって構成されてきたかを調べ、相互の関係と認識を変えることによって、解決をはかる道がみえてくる。

⇒認識と関係を変えるための思想：物証化。弁証法

- 物証化：人間と人間の関係（目に見えないもの）が、物と物との関係（目に見えるもの）になって現れてくること

Ex) 貨幣：生産関係の物証化

人間の能力：親の学歴、経済状況（文化資本）——これもまた生産関係のなかで得られたもの——の物証化

⇒「個人」というものは（生産）関係が物証化したもの。

- 弁証法：関係を変える方法のひとつ。
 - ヘーゲル、マルクスの弁証法は古代ギリシャの「問答法」に由来。
 - 問答法
 - 相手の議論に内在する矛盾を指摘し、疑問を投げかけて対話する。
 - 自分が真理に至っていない、自分が矛盾している、ということを知覚する（無知の知）

- 雄弁術＝自分の主張を相手に説得する技術と弁証法の違い：自分が無知であることを自覚し、内発的に対話する両者が変化するかどうか。
- 弁証法的展開：対立する個物（「私」と「あなた」）は精神（ヘーゲル）ないし生産関係（マルクス）がこの世に現象している形態であり、その変化の過程。
 - 即時段階＝共同態が矛盾を自覚しておらず、お互いが一心同体だと思っている段階
 - 対自段階＝矛盾に気づき、「私」と「あなた」が対立し始める段階

⇒この状態から関係が変化せず、対立が固定化した状態になると、いくら働きかけても変わらない相手がよそよそしく見えてくる（疎外）

- 止揚：対立関係を乗り越えて、より高次の段階に変化していくこと。これは元の状態に戻ることはありえない。
- 現象学、物証化、弁証法という二十世紀思想は次のように応用できる：

「『AとBが対立する』という個体論的な発想を、見直す必要があります。『労働者』と『資本家』、『男』と『女』、『私』と『あなた』は、関係が物証化している、事後的に構成されているにすぎません。対立してどちらかが勝つということはないのですから、関係を変えなければなりません。」（367頁）

代議制民主主義の再活性化のために

- アンソニー・ギデンスの「再帰的近代化」
 - すべてが再帰的になる、作り作られる度合いが高まり、安定性をなくしていく近代化のかたち。

vs. 「単純な近代化」：個体論的な合理主義が成り立っていた時代の近代化のこと。

- 主体がある、客体を把握できる、計算して操作できる。票の合計が多数の人を代表にすればいい。そういう考え方で政策ができた時代。

⇒その前提である「個体」が成り立たなくなり、「こうすればこうなるだろう」という予測も成り立ちにくくなってきたため「単純な近代化」も成り立たなくなった。

- どうして「個体」が成り立たなくなったのか？
 - 経済的側面：ポスト工業化
 - 関係の側面：人々が「自由」になって、選択が増大したから。

⇒関係の両端にいるひとの選択（できることを意識すること）が増えたから。

- しかし合理的に選択する主体が増えるなら、人々の行動はホモ・エコノミクスのそれに近づき、予想しやすくなるのではないか？←これも個体論を前提とした発想。「こちらが何かすれば、相手も影響を受けて変化」する。
- 「現代の社会で増大しているのは、自由の増大というよりも、こういう『作り作られる』という度合い」（381頁）・・・「自己」「伝統」も作り作られる。・・・「再帰性の増大」

⇒カテゴリーの限界に行きあたり、左派も右派も行き詰まる。

- 左派：農民というもの、労働者階級というもの、若者というもの、女性というもの、それらに依拠した政治が、成り立たなくなってくる。
- 保守派の逆機能：相手に「伝統的な行動」を要求するにもかかわらず自分は「自由」であろうとすることが原因

- 原理主義：伝統を不変のものとみなす右派⇒その弊害：暴力と対話拒否。
対話に参加して自分が変化することを拒む人は対話を拒否する。対話を拒否しながら相手を支配しようとする者は暴力に走る。

- ギデンスの提案：「対話民主制」

- 対話を通しておたがいが変化し、新しい「われわれ」を作る。

⇒こうして作られた「われわれ」の間に成り立つ信頼を「能動的信頼」とギデンスは呼ぶ。

- 能動的信頼：自分が相手に何をできるかを考え、それを実行して得ていく相手の信頼。

- エンパワーメント——対話可能な「主体」の形成
- フレキシキュリティ——基本保証：カテゴリーに捉われないで済む
- 保護、パターナリズムからの脱却
- 自発的結社の利用

こうした再活性化をしないとどうなるか

- ベック「ブーメラン効果」：自分には関係ないと思っていたところから、自分に危害がはねかえってくる、というもの。
- 「リスク」：「リスク」は人が働きかければ減らせると同時に、人を行動へと駆り立てる。

まとめ

- 「旧来の「われわれ」にもとづいた政治が、人びとが「自由」になるなかで崩れているのであれば、新しい「われわれ」を作るように努力する。公開と対話によって人々の参加をうながし、そのための場を作って決定権を持たせ、エンパワメントするのが政府や専門家の役割だ。」（422-3 頁）